

# かごしまNIE通信

教育に新聞を



Newspaper in Education

発行 鹿児島県NIE推進協議会（南日本新聞社内）〒890-8603 鹿児島市与次郎1-9-33  
電話 099(813)5168 FAX 099(813)5017 メール nie-kago@373news.com

## 日本NIE学会鹿児島大会

### 新聞活用の効果検証

### 実践校が調査に協力

NIEを研究する日本NIE学会（阪根健二会長）の第15回鹿児島大会（実行委員長・上谷順三郎鹿児島大教授）が、昨年11月24、25日、鹿児島市の鹿児島大学で開かれました。「資質・能力の育成とNIE」を大会テーマに、同大の3人の研究者が、実践校1年目の川内中央中学校と谷山小学校の協力を得てNIEの教育的效果について調査・発表し、注目を集めました。

### 無回答が大幅減少

●川内中央中学校  
1年生を対象に新聞制作を通して表現力向上を見る調査と、2・3年生の社会科で複数の記事を見る調査と、1年生の調査は、鹿児島大の原田義則准教授が関連づけて読み解くという、2つの調査を実施しました。



学会で川内中央中学校の「ふるさと・コミュニケーション科」と国語科の連携について実践報告する教諭たち＝鹿児島市の鹿児島大学

日本NIE学会・鹿児島大会は、シンポジウムや分科会があり、全国から約130人の研究者、教育関係者らが参加しました＝写真。

### NIEの役割を議論 全国から130人参加



NIEでどのような資質・能力が育つのか、さらに新学習指導要領で求められる読解力や表現力を育成する上で、NIEの果たす役割を議論しました。

シンポジウムの指定討論者を務めた鹿児島県教委の山本悟義務教育課長は「学力向上へ向けて、思考力・判断力・表現力の育成が課題。教育的効果が高い新聞活用を現場に紹介したい」と話しました。

発表後の分科会で、谷山小の立和田大樹教諭らが、同校の実践を詳しく報告しました＝写真。

### 要点つかむ力つく



●谷山小学校  
田口紘子准教授が4～6年生を対象に、新聞活用と読解力の変化を非実践校（鹿児島市）と比較しました。

しかし、秋の調査で、谷山小の5、6年生の方が適切な見出しを書く児童が増え、無回答が大幅に減少。記事のポイントをつかむ力がついていることがうかがえました。

を活用して意見文に取り組んだり、新聞記者からインタビュウ方法を教わりました。

夏休みにそれぞれのテーマに沿って調査や取材を行い、新聞制作。学習効果の確認として、鹿児島学習定着度調査の過去問題を利用。記事やグラフを見て文を作る問題

の正答率は県平均を大きく上回りました。2・3年生の調査は溝口和宏教授が担当。複数の記事を読み解く授業や中間・期末テストで新聞記事を使った問題を出題し、生徒たちがNIEをする前と後を比較しました。すると、記事比較の問題で見出しを引用して

この記事を取り上げ、見出しの一部を空欄にして埋めさせるという問題で、春の時点では両校に大きな差はありませんでした。

谷山小はNIE実践校として記事の読み聞かせや要約する活動が増えていることが背景にあると見られます。

一緒に読もう！新聞コンクール

鹿南高に学校優秀賞

奨励賞は岡部さん(出水商高)ら

家族や友人と新聞を読んだ感想をまとめる「第9回いっしょに読もう！新聞コンクール」(日本新聞協会主催)で、鹿児島南高校が初の優秀学校賞に輝きました。個人の奨励賞には、茶花小学校(与論町)と出水商業高校の3人が選ばれました。

熱意と意欲がある学校を表彰しています。鹿兒島南高は記事を読んだ感じたことを書き込むワークシート「新聞を読む日」に取り組んでいます。コンクールには夏休みの課題として取り組み、9割以上の生徒が挑戦しました。生徒たちは「社会への関心が高まりました」と話しています。奨励賞に選ばれたのは、茶花小6年の後藤千乃さんと三上純輝さん、出水商業高1年の岡部鈴々さん。3人は長崎原爆の日核兵器廃絶を訴える被爆者を取り上げた記事や、加計呂麻島でサンゴが半減した記事などをそれぞれ取り上げました。

学校賞は、新聞に日常的に触れる活動を行い、

「コンクールには全国から5万2155編の応募がありました」と話しています。

は、茶花小6年の後藤千乃さんと三上純輝さん、出水商業高1年の岡部鈴々さん。3人は長崎原爆の日核兵器廃絶を訴える被爆者を取り上げた記事や、加計呂麻島でサンゴが半減した記事などをそれぞれ取り上げました。



優秀学校賞を受賞した鹿兒島南高校(上)と、奨励賞を受けた茶花小学校(中)と出水商業高校(下)の児童生徒ら

はがき新聞で読解力向上



はがき新聞の作り方を指導する上村礼子さん

多様な視点学ぶ

推進協 主催

鹿兒島県NIE推進協議会は、はがきサイズの新聞を作る「はがき新聞」のワークショップ(県教委後援、理想教育財団協力)を1月5日、南日本新聞会館で開きました。はがき新聞の第一人者、東京の九段中等教育学校の上村礼子副校長(さつま出身)が講師を務め、教諭や児童など約20人が、作り方や学習効果などを学びました。一つのテーマに沿って、視点の違う複数の短

い記事で作るはがき新聞は、読解力や表現力がつくと、全国で広がりを見せています。上村先生は「限られた字数の中で、言葉を選択して文章にします。事実と意見の書き分けや、伝えたい言葉などを考えながら進めることで、文章をまとめる力がつきます」と話します。はがき新聞ができあがったら、クラスで発表会をすることがポイント。「子どもが自分と違う考

えを知ること、多様性に気づき、違いを受け入れることで思考力が深まる」そうです。上村先生は「人工知能(AI)にないものは人の感性。はがき新聞を通して、目的に応じて情報を

選び、相手にふさわしい表現をすることで、感性を磨くことができます」と指摘します。推進協議会では、はがき新聞に力を入れていきます。興味がある先生方はご連絡ください。



実践校便り

保護者と一緒に記事選び

柏原小学校(さつま町)

昨年9月7日、全校児童93人と保護者らが「ファミリーフォーカス」に挑みました。児童が当日の朝刊から気になる記事を探して感想を書き、保護者がコメントを添えました。



アップとルーズ写真撮影を学ぶ 輝北小学校(鹿屋市) 昨年10月24日に4年生24人が出前授業を実施。南日本新聞の記者から、国語の単元「アップとルーズで伝える」で、内容に合わせた写真の撮り方を教わったほか、興味のある記事を探しました。